



9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9 190 1 2 3 4 5 6 7 8 9

貴
14
3163
204



萍の跡序

（本重）

淳子の跡とゆりてもうすはりがく人こそ。
大床庵主とし人也けどがくめくらひの同子
ふれ耳よ入てをくよりやとよすよの生くは
をくくかれハ二事とも是ハからんきとせとくふ
すれどもすくよくよの生くはくは
いまよ草木にかじりあひきれりにまづのねとくよ
はなに枝とくらかどもよほおなとく人に

はすよるまじくおのたてまつてみるせ
うけはせひくのうかくをもじゆくまほせ
やつらうちを元ともなれき誰もくまくまくとく
ゑそりて草むかまびりてせまほくとせまほ
あくとゆのみがくもく画しもあくひとくとく
さくにハキセラルもあも。ほんじよたを
まやめれよとまは葦をほまの跡とまわる
ああとがくじよとーとてせたぐりとすば

うかのすゑとおおじとだうとたへあくや
花うり。あれきしてひからくらむれしきふくわせ
いふくや。まく葦をハ佛をとくとく
すを故んとする人也。一、あれものまみの
せよきれどとおまのまちのへるゆきこの
まゆのたまととくとくゆきとせよと
かくわく。せよとくとくゆきとみよ
ゆきとくとくゆきとみよとくとく

アガリテアムナリセモアハナリナキ。アハ
マムナリセモアヒテアセヒアマキ。ミトシ
タニシハ菴ミセモアヒムカセモアキセモア
タニシトシアヒムアヒムカセモアシハ菴ミシテア
セヨシカタナリカヒテアヒムトシテアレハジル
人ニシカタヤクシミモサツコアリセヤカ
シキリ

風雲倶の行
本間勝清

アヘタシムハナリ前ハシ浮名のアヒリ
ミシカタヤクセモアヒテアセヒアマキ。ミトシ
アヒリセモアヒムカセモアキセモア
アヒリセモアヒムカセモアキセモア
アヒリセモアヒムカセモアキセモア
ア物のアヒムカセモアキセモア
アヒリセモアヒムカセモアキセモア
アヒリセモアヒムカセモアキセモア

津はと様めのへ、ばく嘗めをもて不思議の
とあらわらむる、いはれども、のうのす
こかとよきゆゑか。ちうてゐたゞひくは
枝をそぞそと、和村をソシムがとうへ
うはくひあらたまめのをやりとくとくわ
てあらじくとよきゆゑ身へくねはる
くねとくねとくねとくねとくねとくね
かくかくのきて物をくみけでせが

とくとくとくとくとくとくとくとくとく
りおさげへおぐとけくとけくとけくと
きくとけのうとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
魚もまたとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
もとくとくとくとくとくとくとくとくとく
の海のばくとくとくとくとくとくとくとく

佐々木のもとからゆきよしは、とみやまへりよ
きゆつるゆ。文化の十八年じつよをきの
八月の卯どより大森卷立綱

目次

- 樂浪之波海 鳴海
曝井 手綱濱
潮来村
時平大明神
比禮振山乃化石 天草人
道遠院内府公嘗の事
咲眉春ハ彦火々出見命の考
河蝦ハ河底の化一たる事
頭
菖蒲の前
小篠姫ハ頭蛇の詰
稻負鳥
端出繩
麻呂 淑曾 阿太

夫 妻

鳥 居

慈 門 禅 尼

東 儀 氏

隱 士 義 脣

讀 棟 梁 集

吉 妻

東 都 の 館 呼
浅間の名義

娶 メトル
婚 メアハ
嫁 メウグ

古 手 屋

棉 袍 禅 師 并 三 女 の 事

餅 ト ゆく だ と す ち

うきよれの道

淡海 大寂庵立綱著

鴻 海

樂 浪 之 淡 海

樂浪ハヒト地名ゆく滋賀郡にあり。書紀小後浪郷萬葉に樂浪海。
樂浪ニ國津御神。神樂浪之大山守ふどみえどり。千載集ふハ
さくあや志賀ノ都ハあきみ」と荀ふかの山機うかとあわ
などなりハ滋賀郡ハ樂浪の國ゆく志賀乃故のこうべハされモの
海とりひあべー。それぢりやくあべーの海の冠辭とありたる
あべー。後すて鴻の海と称ともい記に於是其忍熊王與伊佐ム
宿祢共被追迫乘舟浮海歌曰。伊奢阿藝布流玖麻賀。伊多
豆。波受波。迹本杼理乃。阿布義能宇義迹迦豆岐勢那和。



即入海共死也とあふより初一也。のち後に之がく
往來すればもうとふなりとあきどいと。この野洲郡に仁保と云
郷あるとく御食あり。和名抄に通保ホといまつり。かしげくりにて
を通保の海とりひらがはづー湖の總名のとくありたるもと
へあそぢき。今れん保の字と濁音にやる。

磯前八十之湊

萬葉集三高市連黒人羈猿歌八首の中磯前務手田行者
近江海八十之湊尔鵠佐波二鳴とあふとれのをくわくが
ぐく磯前ハ坂田郡ナカタなる磯崎村、八十之湊ハ大上郡ハ坂村ある
也。ひとひづるが後畧解とされ同考ゆくこと八十之湊ハ一所の
名ときたこと宣長も以つて。レド或人の近江海湖八十

かまね草花木サカ
のゆりとさくさか
サカの内リキサを
持る

八坂ノ説い

せあかとねどばとせきりとりきどハ坂とり村の前後小坂と
べきとみゆふりれハ坂假字ナカにく佐加の約曾あきバ八十之湊と
くあくとくざひき。とく八坂とく村ヒコ子の在根ヒコ子一里とくから西とあ
ゆり坂崎とくじく一里とく北とあくつてとくに海濱あれハ此
とくふくやくひたり。それ海濱のうくびゆくハ筑摩磯崎松原
長曾根大敷ハ坂とほくき磯崎シマザキとくにハ山あく磯山
きり。この山の西く水際ミヤキ。ゆく石のゆくとくひふと書ふとくた
らん。此山にまゆふ神と日本武尊ヤマトタケシモトとく磯崎明神森
す。いぬ磯前とありく磯のゆくとくまんりとくにけじ。さてまび
まびね奈とく千々の松原あり。またまびに田津とくをは
それ真鶴マツヘルとあく鶴あくとくゆく海ふくまく磯寄より



ハ坂ふじくふさぬらくひかひしり。今ううに出でたれ面ハ人のまゝもれ
ふ中山道の櫛針嶺スリハタケナカをとむ望湖堂ハウコウダウよりみるやうあり。今が支の面
あらわとよそそれぞののとす。こゝに物生山ムレヤマとあるハ佐
和山ワカマツへはむかへ度根ハシマツハ此山ハシマツの西ハシマツあまくみど。ハ坂ハシマツへそれ度根
の西ハシマツ。おもと歎コシヤクの眺望テラビタもこれ磯崎イシザキのアラシシハ坂ハシマツと窓
よど。それゆふれ此物生山ムレヤマのぼりき大洞オホオホとりみと窓カハラと
第一ヒヨウとあるわう。そんへし事モノとづく郷里ナカトのとあるをかくわう。

あふみゆり

古今和歌集 大歌詠詩序オホウタドコロノオン奇ヲとあふむとみにあふみゆりく
まうりをくわへ宇根你タレのやふをばくすあまねは夜ハヤシタと
うとのとくまでり。この初ヒヨウ文モノあまくらとあまくらふの他國エビシニ

のとくめ。あくびのとくとみか國ミクニ名メイあくび。それがあまく
大カミ箕カミ假字カナのだハふにあくびカミとくカミふくカミ人ヒト小林義兄コキンヨシヨウ。伊
香郡イセに大箕カミ、今カミの面ハタケたりとハタケりておありく。畠野カタハタよりハタケりておればハタケき
り。大箕カミより畠野カタハタりありく。三里ミリよりく大箕カミへ
乃ハナ驛ハタケからくハタケく。和名抄ハナフシに。されば誠コシり東ヒタチへのまぐのくをおもふく。
さうしたての一首ヒガタのとくとくカミにこすぬ

網浦アミナウラ

萬葉集一卷 章讚アヌキ政安アヤノコホリ益アシタカ郡アシタカ之時イマ軍王アミタ見ミ山アシタカ作歌アシタカとある長歌
小網熊浦アミハクマウラ之海處アシタカシタマツ女等アガタ之燒塩アシタカシタマツ乃ハタケくとハタケふ網アミハ網アミのあらゆ
つよく津野ツヌ乃ハタケ浦アシタカと真測アシタカシタマツハラヘ。千蔭アシタカシタマツが畠解アシタカシタマツ小里アシタカシタマツ神祇アシタカシタマツ
式讚アシタカシタマツ岐國アシタカシタマツ綱丁アシタカシタマツ和名抄アシタカシタマツ同國鶴足郡アシタカシタマツに津野ツヌ郷アシタカシタマツあり。そこれ浦

あふべー。綱やつのとつが古言たりと。さると宣長ハ檜綱の
うれまーじまで。不のきがこへまつて。津野の
かふとぬけし。とハ丸龜も高松領に津野に海づと歌
津よりあり。その歌はもろ在のと十五六であるとハみかねくあ
いと向まとをうかべ。まのとへよくわゆり。と
津野乃郷とひせとあると津野山と。こう安益の
松山とほく。また歌はもろ北乃川牛にやるが狹峯嶺
あり。地名はもれとあるとあくまでもうまくし

曝井 手綱演

萬葉集卷九那賀郡曝井歌一首とあるく三栗乃中再向
有曝井之不絶將通彼所再妻毛我とひふ成畧解にて
手

賀ハ清音ふよひべー。那珂トノアシニ海圓にて紀伊那
賀ハ和名抄云くとあり濁音にうひく武藏アシハアリと
清音あり。小崎沼ふちく載され武藏ノ那珂アシヒテ
或人アシヒテしわの若ト出されぬ。おのきヒタスルと
おとしほふそんほどとぞうつ秋月にありまされ人あけ
つゆひに常陸ノ國アシヒテ。けかともくくアシヒテ中山
信名四郎俗稱平が絶きませバモれ證明らきあり。常陸風土記曰。當
其以南泉出坂中水流左清謂之曝井。緣泉所居村落婦女
夏月會集浣布曝乾このくも水々あく史館ノ總裁藤田氏
とうひれもくらむくらむくらむくらむくらむくらむく
やうハ中河内村へす坂なり。そのくと曝臺より。それ
裾

乃田とよし日よりつ。今も坂のあらまに清水のりきり出る
とく。佐名の考にげしとひ茨城^{イバラキ}郡に属すとり。この方
の歌ふ手綱演歌一首遠妻四高専有勢婆不知十方手
綱乃演乃尋来名益^{アリハシナリ}畧解ふひづきゆきとて
せん。それも常陸の國ゆくればいかず海津のかへりたふ
みやうはあり。人の人みてづむといふ。そぞらのちうふと城ども
とくろをり。あふ^{スカ}ありきばよ。ふむ信名の考^{トタカ}多珂郡多
珂^{カナト}郷^{ヒヨコ}この手綱ハつゝの郡家^{カミヤマ}とて。それとて
高^{タカシマ}かくとてかくとて。二首共にあひまわすく
常陸^{カニツ}あくと唱^ハけし。小崎沼^{シガキヌマ}の^タハ鴨^{カモ}の^タに^タ新^{ハタチ}あきと
の二首ハ相聞^{ヒビキ}の^タからば^タと^タあり。佐名ハ主國の地もく人

ふあくさくへきとお

行方^{ナノカヌコトリ}郡

常陸國行方郡をふゑ^{スム}こむす。訓をひいれ^{スム}。行^{スル}郡事
小宮山氏^{コミヤマシテ}のとくに^{スル}。行^{スル}七陽^{シナウヤ}の韻^{カタ}。行^{スル}行列^{カイリ}
とづき。鴈行^{カゲ}魚行^{カギ}など詩ふはくも^{スル}。くはくがりふよ
うれり。歌^{カニ}小駒^{ココ}ふゞとくも^{スル}。と萬葉集に毛馬並^{タマハシ}而^ハと^カれ
くじゆとあく^ハ。歌^{カニ}小駒^{ココ}と書^{スル}。と毛馬並^{タマハシ}を^ハも^{スル}。
あくと毛馬並^{タマハシ}ハヒフヘホ乃^ハふゞと^カ。とモハメモ^トも^{スル}。と^カ。
と^カのあく^ハ。音^{カニ}ハヒフヘホの濁音^{カニ}と^カ。訓^{スル}。と^カ。と^カ。
スモハ清音^{スモ}と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。書法^{レヨ}。讀法^{ホフ}。と^カ。と^カ。
と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。と^カ。

トシムカタヒトモアリ。今ノ人ハアシテ候ムケモナケガタスル
ワキニキタスルニシ名ガリニアシテシレサヘ。アシカシトミカバ
ト、アシカシトミカバヘトエ乃音ハシカシタスルトシ。ハ行方と
アシカシトミカバスルトシ。アシカシタスルトシ。アシカシタスル
タスルトシ。アシカシタスルトシ。滑方タスルトシ。行方トモ望
ムカシトミカシタスルトシ。アシカシタスルトシ。各波タスルトシ。アシカシタスル
ベ。人の名木並樹氏に行スアシカシタスルトシ。アシカシタスル
アシカシ。後香澄ノハシカシ行キテ行方村あり。郡の名ハ村也
トシムカタヒトモアリ。

潮来村

潮来村を同郡にありムツツアシカシタスルトシ。淫肆アシカシセのノカ

シムカシタスルトシ。アシカシタスルトシ。里ビハシカシタスルトシ。
おとれ。里人の危ハシカシタスル板久トカシムト。アシカシタスル
アシカシタスルトシ。アシカシタスルトシ。和名抄に坂来ト有ハ坂板トガナ
トミガバ從是往南十里板來村近臨海濱安置驛家此謂板
來之驛云又曰板來曰有凶賊掘穴造堡樓止淨見原天皇
タカシノコトヲカヘテノラタクマクレスコトキツクナシテイテコロモラテイテ
遣建借間余討之賊悉燒死此時痛殺以所其言今謂伊多
ナト、伊久之郷トアリ。シバ痛苦ノよアシカシ板來トカシム後トモ
板久トアシカシタスルトシ。アシカシタスルトシ。アシカシタスルトシ。
を小官山氏ふとハシカシ。國乃官醫板垣法橋宗憲侍醫也
ハシカシ某に被され候事書シムト。アシカシト。アシカシト。アシカシト。
麻疹アシカシト。アシカシト。アシカシト。アシカシト。アシカシト。潮宮

トヨモリ。いとよハ高ミ祝於少ヒ。バ常陸の方言に潮とい
バシバロカシキアリトモ。レバかの君ル字乃雅
シテシテアリ。後麻一匁に舟と經ケ風
ボシテヨリ。余のトヤニキサトナリ。バ高倉下れりとモヘ
ヌ。ヤシク高倉下トリハ神武紀曰彼處有人号曰熊野高倉
下忽夢天照大神謂武甕雷神曰夫豐原中國猶聞喧擾之
響鳥宜汝更往而征之武甕雷神對曰雖予不行而下予平
國之劍將自平矣天照大神曰諾時武甕雷神登謂高倉下
曰予劍曰師靈令當置汝庫裏宜取而獻之天孫高倉下曰
唯。而寢之明日依夢中教開庫視之宗有落劍倒立於庫
底板即取以進云くとあり。志モ不板宮トヤシラモニ
八

この國の方云み潮とりひととビノ板宮と潮宮トヤハドウ
カシモ。さればセジツハ莫ムトモアリ。モヤシリモカエアム
シモの多シシムトモアリ。風土記へ安置驛家此謂
板來之驛とある。カシモアリソアリ。陸奥へシテ海津道を
カシモアリ。今リ板來之驛。このモハソアリ。カシモアリ。
浪逆海シテ近臨海濱。トモリモカシモアリ。これモ四丁目
トモリ。神明祠也。神輿ハ驛路の鈴れり。閑田耕筆にて
看シトモアリ。宮本葦村。俗稱。うり。葦村ハ名と云
乃名家官本氏の嫡子。カシモアリ。モカモアリ。祝部の名ハ額
賀長太夫トシム。

高房神

廣嶋にまこと高房神とゆうとハまと建葉槌余にく神代
卷一云とつてふに故加遣倭文神建葉槌余者則股とあり。
倭織とくも免をゆく神あり。されば倭文神とハまこと高房
乃御名ゆき出るかまべー。古語拾遺小天富余更求
坂壞公阿波齋部率往東土播植麻穀好麻所生故謂之總
國穀木所生故謂之結城郡古詔麻謂之總也今為
好麻之所生故謂之總國とゆきと高房ハ生麻乃義うべー。高
も高皇產靈余高慶根余れりとあはる。和名抄常陸國
久慈郡に倭文郷ゆり。まことに倭織とくも免にゆくし。
今ハ那珂郡に屬。静村より。倭織とくも免にゆくし。
ツメハ何き力れとあはと畧にゆく布佐とくへおゆ。されど幼め

字のくと署く例ありや。れのま云々ハ磯城島とゆくもくとも。磯
馴松とよきてやあれねま。逸早振とちくやぬま。それと移し

時平大明神

下野国安藝郡に古居村とゆく。そちくにゆく神ハ藤相公の御
靈とぞ。その隣村神岡とゆくに祭をひく。菅相公ふく隣村ふく
中あく此ニ村男女やく縁とひとべ山事行りし。古居村に梅と
うなじ衣類ゆく梅のくわとはあらじとぞ。毛づくくとぞ。六
佐野乃近郷あるひくへか

菖蒲の前

毛づくく後木とぞ。伊豆の國ゆくミトと云々をこねりとく。毛づ
くくキセウとある。二所やむにいふ書く。その字とくとくし。も不乃
毛づくくの名をゆく。ミトのゆくにキセウとくとくとろあり。

萬葉集五山上憶良のうちに得保津必等麻通
とりひづへぬ。萬葉集五山上憶良のうちに得保津必等麻通

山上に賴政卿の女君菖蒲の前乃廟あり。うへる。芦の湯
宇治川乃合戦に宮うちしきあ
息子達がくらも運
あやもの前より打具。紀州より船にて伊豆國へ落しき去
あるふに伊豆みくあやもの前かくかく。バ同國ふあき。ヤ
さき靈廟とばなれをねと家系にあそり。其後裔越後國に
やくれ居る後く。農業と。内々小鎌信乃三海はうつむく者
えぬるから。川中嶋乃合戦にいき。戦功あへばふわらすまじき
そりく農業とはよろぬ。余りをのゑにつけられ。今僧といふ
き。此所うち伊豆乃廟所をかくとびつくり。辨と。ちうとをゆく。
きくれどり。今ひと夏かくとゆる。かくとあ

フミ。其後つまてこしゆに。かくおとふりあひ。伊豆人に會ふると
にわとひせしハナづねといはき。ときわとくふりあひ。或とき
三嶋乃在れる。醫師に會す。あそく此へと。かく出でて。醫師
云。實に其ことなり。伊豆小ゆく。明神小ゆづらず。此をう
み。うりをふ。あうや。といつと石原理安衛あへり。と佐木壽六
京師。箱根乃芦湯へまづりしゆた乃話。小ちりしたる
比禮振山の化石。天草人。

松浦佐用姫は大伴連狹手彦乃室。かく狹手彦奉勅命御軍と
率く西蕃に。わざひく。時佐用姫とく別を。しづく高山に。なほり
領巾とぬり。行船とす。そこへまくはく。石と。わたりたゞ
とりひづへぬ。萬葉集五山上憶良のうちに得保津必等麻通

良佐用比米都麻胡那ヲナヨヒメツアヒリ比例布利之用利於返流夜麻能
奈ハナシとあつまく今ハ其山ヒレルサキと比禮振山フリサキとさへよ龜井道載カバヰダウザイ
佐用姫の名となり。ナニタガ世のうらや
トスミナハサエ。アモスモハサエ。アモスモハサエ。
書々みと龜井氏の話とがんたを今世
説のすとす。
小佐用姫ハナシとあざると誠ハナシあり。今も彼山ハナシよりまわ
とくふ姿ハナシなりとすり出ハナシされり。わのまはえもあつてさとえ殿ハナシ
あり。ま。とくふ姿ハナシなり。よきにつけたつてまわらずに西国ハナシハシミル女
あり。ひやくかく別ハナシレジリ。とことにくへ。やへきと身ハナシなり。橘梅仙
が西遊記ハナシに。ふ。あ。か。す。り肥後國天草ヒデノクニアマクナの人ハナシ其情ハナシづく人の
ワきハナシとほあく濱邊ハシマヘみづきハナシだ。のうをくり。女を老りワ
きり。かく。砂ハナシに。くちかハナシく。こく。く。く。あ。ぐ。く。り。あ。ご。ど。な。わ。ふ。
見ハナシば。か。く。い。お。と。ロ。く。か。く。く。そ。く。く。く。あ。が。く。り。あ。ご。ど。な。わ。ふ。
ゆ。く。か。く。い。お。と。ロ。く。か。く。く。そ。く。く。あ。が。く。り。あ。ご。ど。な。わ。ふ。

それぬ体ハナシに。や。か。ひ。び。く。一人ハナシ。ち。め。ぐ。く。れ。か。く。ま。く。か。の。の。
か。う。ま。く。の。わ。か。く。と。か。う。に。舟ハナシと。ま。ね。く。や。ね。う。み。お。た。い。じ。で。
笠ハナシか。の。べ。つ。ま。く。や。ね。く。と。を。大。和。物。語ハナシに。車ハナシを。ぬ。わ。の。や。く。と。と。と。
い。う。と。舟ハナシの。う。た。る。人ハナシ車ハナシを。ぬ。わ。の。や。く。と。と。と。と。と。
船ハナシの。う。た。る。人ハナシ車ハナシを。ぬ。わ。の。や。く。と。と。と。と。と。
一。つ。と。さ。う。と。あ。け。ふ。と。
佐用姫ハナシが。ひ。と。ゆ。り。し。な。う。わ。く。べ。

小篠鍬ハナシ八頭地ハナシの話

古事記是高志之八俣遠呂智ハナシ毎年來與云ヒトツニカシラヤ身一有八頭八
尾ハナシ云ヒトツニカシラヤ神代卷每年為八岐大蛇所吞ヒトツニカシラヤとあるや。便ヒトツニカシラヤ
よ。よ。よ。よ。遠呂智乃遠哈尾ハナシあり。呂ハ助辭ヒトツニカシラヤ山鳥乃と云の初尾ハナシ

あどハキミシナリ。萬葉集に「ひとろをさくわねあま」と。
智は巖ノ下に千早振かどアキ智トホシテ、アシムシテメ
縛れり。蛇ハ尾ふぐれビキシキのキレハ遠呂智トハリ(カムアゲ)。
とくこのハ波大地と漢學者(カラマヒト)、アドハヘ頭乃地(カマヒト)アラヒテモヒト山戰の
名ナリヒロアリ。ワジノミス(演田疾文學)とカムシヒトニ彼國ヤ
殿乃とヒトシヒトシの安藝國(アギ)ノ境(カカヒ)に八面山(ヤオモチヤ)ト
細(タガ)ニ面(ハ)トハ丁(タガ)トジテ、草刈(クサカリ)の籠(カマ)ト
ミニハ頭(ヤハタ)ニ蛇(フロウ)アリ。シルトシカシカ人(シルトシカシカヒト)アリ。それ、全身(ゼンシン)ト
スル。其蛇(タガ)アリ。眼(モチ)ヒトシヒトシの氣(キ)シナヒトシ。
モチヒトシ吉殿(ヨガト)アリ。この人(ヒト)アリ。蛇(タガ)トアリ。其全身(ゼンシン)
ノムヒトシモ多被(タガ)ヒ。こゝのうへ一歩(ヒトダカ)ヒキタヌ。ばくらる
たゞ。

畠(カタ)アリ。このほと真風(カム)ヒアキトシ書(タヌ)ム。草子(サシ)トシアシトシ
ナリ。されば石川(キシラ)邑(ヒラ)知(シテ)郡(シテ)出羽(イブハグ)組(ヒツ)百姓(ヒツヒツ)勘(カ)三郎(ミツロウ)トシアシトシ
トアシトシ。其細(タガ)ヒトハ面(ハ)トシ。八頭(ヤハタ)ノアリ。一尺餘(ヒトダカ)ヒ
トシ五丈草(タガ)ヒ出(アリ)。三尺餘(ヒトダカ)ヒ敏(タガ)ヒシヒトシアリ
タゞ。

逍遙院内府公鷦(ウガヒス)

古令集(セウエイシキ)百千鳥(モチナドリ)ハ諸鳥(モロトリ)のアリ。ハ契冲(ケイチウ)真潤(マヂン)の委(スシ)ト舞(ヒム)
モアリ。今(ヒコト)アリ。それがアリ。アリ。阿(ナガカ)高(タカ)き逍遙院内府公(コキンデンドウジン)ノ
シシムル。而(モチ)シムル。ば(モチ)アリ。にわ(モチ)アリ。年の(ヒコト)アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。内府公(コキンデンドウジン)ハ古今傳授(コキンデンジン)ノ人(ヒト)アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

うがくがくのひ

稻貞鳥

○
同集權部に「^{屏門}」と書ふやれお下さるの事あらずにまわゆへ、アガハ
居ハシムトウトモアカリハジヘ乃説ある。トモハシムトモアリ定名也。^{ナガ}
キ。本居宣長ハ、トモアカリ、雀の事もアガヘ。ナシカハ、トモアカリ乃
うはりする處也。トモアカリハ、アガレタモアレタモの名義とともに
ナシ。候か人の説に、古日説に庭^鶴鳥^鶴と云ふ。この鳥に二
品あり、一は鶴、二は鳩也。其のちきり尾と上下にうごマリ^フとつまると
曰う。又その上に左尾と左右にうごマリ^フとつまると云ふ。が
ミ、鶴鷦^{キサヒ}と云う。そハ人の事かと云ふ。アガリとあつて云ふ。ア
ミミガタと云ふ。アガリと云ふ。アガリと云ふ。アガリと云ふ。各

アガリと云ふ。鳥があんにあか、アガリと云ふ。アガリと伊豫^ヨ
の國吉田^{ヨシタ}より來て、此集^{ヨシタ}に記す。講^{ヨシタ}説^{ヨシタ}、
お人方から來り、此山^{ヨシタ}をもれくみふとありといふ。此人には
アガリと云ふ。年^{ヨシタ}と色^{ヨシタ}が、常陸の鷺鳥^{ヨシタ}。
アガリと云ふ。社家下生^{ヨシタ}青海^{ヨシタ}が、アガリと云ふ。こゝ^{ヨシタ}の演進
アガリと云ふ。出俗^{ヨシタ}とビンズイ^{ヨシタ}。八月^{ヨシタ}まにアガリと
冬^{ヨシタ}から來りしも、あるにてては、屋代^{ヨシタ}、賢^{ヨシタ}、所藏^{ヨシタ}の觀文禽
譜^{ヨシタ}と云ふ。鶴鷦^{キサヒ}に數品^{ヨシタ}、ふれ^{ヨシタ}石見^{ヨシタ}鶴鷦^{キサヒ}トウ^{ヨシタ}尾と左右小
うこ^{ヨシタ}かと云ふ。アガリと云ふ。石見國^{ヨシタ}より出^{ヨシタ}、アガリと云ふ。アガリ
アガリ。アガリと云ふ。アガリと云ふ。アガリと云ふ。アガリと云ふ。アガリと云ふ。アガリと云ふ。ア
ミミガタと云ふ。



シマホウセイ、寫真



リとその御子がとある事なる。好士乃志ひよ。やくす
やくすれど。顯註密勘に。猶鶴鷦と。無差證
あきば今。其の伊豫。ふれと。慶鳴れと。同種
う。其羽色。ゆかり人傳ふ。せば。あふあくと。りえ
ミ鶴鷦の。かくあり。と。かく。と。かく。と。かく。と。かく。
くわされと定め。鳥の名と。今。か。や。ちふれ。き。ぎ。あ
りふあ。す。

咲眉春ハ彦火出見尊の考

世ノ七福神ト。一曰。若狭川。咲眉。主。り。像。と。然
皇御國の神也。は。ち。れ。ぬ。さ。き。ど。り。わ。る。神。う。い。あ。ふ。お。よ。ー。乃
御名。一。お。く。蛭子。と。お。こ。み。み。え。く。蛭子。と。お。こ。額。又。は

蛭子宮。やうか。東祠。戎社。あ。く。み。る。い。東戎の。い。ハ。え。じ。との
假室。に。く。蝦夷。と。日本書紀。小愛。瀬詩。よ。く。ふ。も。く。も。く。べ。
鐵轍。中。國。ト。り。や。一。色。く。鰐。の。義。り。も。く。ぞ。く。鰐。子。と。伊。牛。冊。尊。の。う。と
御子。み。く。古。事。記。ハ。久。義。度。迹。興。而。生。子。水。蛭子。此
子。者。入。葦。船。而。流。去。舊。傳。記。書。紀。ハ。次。生。蛭子。雖。已。三。歲。脚
猶。不。立。故。載。之。天。豫。樟。船。而。順。風。放。棄。也。あ。ま。く。不。祥。御。子
あれ。が。く。づ。し。ま。ゆ。い。と。あ。と。と。世。の。人。づ。く。福。の。神。
あ。く。づ。く。ふ。い。あ。ん。ま。く。蛭子。ハ。比。畠。古。と。く。惠。備。湊。也
も。じ。す。れ。よ。く。接。津。國。西。宮。と。惠。備。湊。の。本。宮。と。ね。と。ひ。ゆ
西。宮。蛭子。ま。く。ハ。西。宮。東。三。郎。れ。さ。く。つ。セ。い。れ。く。ふ。り。く。び。ぐ。の
絶。あ。き。と。と。び。く。う。け。び。ひ。び。西。宮。ハ。免。原。郡。に。あ。き。ば。延。喜。式

神功皇后紀云才時
皇后之船廻於海上
以不能進更還營
水門而止於是天
界大神詣之見我
荒魂不可近皇后當
御心廣田國即以
小舟根子之女乘山
令祭トヨウ

ミミナリ大國主乃西の神社小アホムシナリ。西宮大神宮と
稱シタルトエバハシルモ廣田宮小アホムシラスオホミガミ
すや。シテカノ小篠飯上ヲザシノミスはソド此シホルヒ
シコハモジトムサマナリ。シテ彼社司某にありく家記と
シムカタナリ。ハシトムサマニアリ。寒川辰清カムカハタツキヨ江国志作者カノミシツレガレ所侯近カノミシツレガレが行小成後カノミシツレガレ石津イシヅの
根津彦コノミコト金コトシロと祭タマシカリ。シテハ神祕ケツムソルシル。羅
山子神社考ザシニシギカラ小アホムシリ蛭子ツチコ小アホムシ。
或オカル云西宮太冲カツモツの蛭子ツチコトム。祠ツブリありそれが奉三郎カツモツトモ。蛭子ツチコトム。石津イシヅの
蛭子ツチコト稱シタラアリ。シテ和泉国大鳥郡オホトリある石津イシヅの社カナリ祭
ミタ神ヤハコトシロタシノミコトハ重事代コトシロタシノミコト主シメリ。シテ延喜式イハツグタか若石津太

社神社カミジミ。惠備湧エビストミハ重事代主シメトシム。ミハ神
代卷ナカラスコトヲシレリに以釣魚エビス為樂エビス。シテ定ササ名シメリ。シテ事代主
金カネ小モ鯛カホのカホシタラ。シテ何故ナニニ惠備湧エビスト名シメラ人ヒト。人の生
らぬナシトワキナシ。シテ元カホ儀カホトシム。シテ筑前フサシ侯ヒサシの文學龜
井道載カガハシ。シテ詩カホのカホ横嶽ヨコヤマ二十四境シシキの一つ。蛭子ツチコ祠ツブリトシム。
つくカホ小元儀カホトシム。シテ主シメトシム。シテ不ハシ可ハシ。シテ
シテ小ワカホ邦カホ。シテ蛭子ツチコハシカホトシム。シテ主シメトシム。シテ
といへばカホ小元儀カホトシム。シテ主シメトシム。シテ笑眉エビス主シメトシム。
モ度火カミヨシキ々出見カミヨシキ余カミヨシキ。シテ神代卷カミヨシキ小元火カミヨシキ闡降カミヨシキ尊カミヨシキ自カミヨシキ有カミヨシキ
海カミヨシキ幸弟カミヨシキ度火カミヨシキ々出見カミヨシキ尊カミヨシキ自カミヨシキ有カミヨシキ山カミヨシキ幸始カミヨシキ兄弟カミヨシキ相謂カミヨシキ曰カミヨシキ試カミヨシキ欲カミヨシキ易カミヨシキ幸

遂相易之各不得其利云云兄忿之曰非我故釣雖多不取
益復急責故度火々出見尊憂苦甚深行吟海畔時逢鹽王
老翁云ハ海神乃集大小之衆逼問之僉曰不識唯赤女比
有口疾而不來固召之探其口者果得失鈎已而度火々出
見尊因娶海神女豐玉姫仍留住海宮已經三年云く度火
火出見尊已還宮一遵海神之教時兄火闌降命既被危困
乃自伏罪曰從今以後吾將汝俳優之民請施恩沾於是隨
其所乞遂赦之謂ヒトあふみとゆくらひり。伉儷と並坐せ
あれハ豊玉姫もべ。これむねむへが乃御名の咲眉主ハ為笑
の義カバ。眉主とてく羨もハ讀法にく惠義須咲満春ア
リ。其の為笑よハレシヒミキナ鈎と得キシ此大御國と

津姫命の誓すゑひく同巻に如實天孫之胤火不能害即火焼
室始起煙未出之兒号火闌降命次避熱而居生出之兒号度
火々出見尊云くやわんとこの御名ハ字れとく火々の義ねか
と倉笑とケンカヒトリハ義ヒタリハ惠備春ヒスコノネイクニ
カの鰐とほりたまへかくらり福の神トモリトモルトカクシヒ
ヒ海幸穢ヒ山幸ト書紀ナリハはハリ大御國とえもヒハ
大もヒ福ケルハ福の神トモリトモルトカクシヒ
ヘキシヒ海宮に入キ角ヒト豊玉姫トみあいもあくこぶセ
ル。度火々出見尊もとあくけ

和名抄端出之繩與注連同續日本紀とは左繩端出とある。
あきとくとくもかばと訓と。上田秋成浪華云志利え米の志
利ハ後あり。久米ハ限目なり。加伎乃約毛伎と久にからくせ云。
埴根ル。まどり毛根ル。久米と久に免。久米の意を毛根の意とす。
岩門たり引出。すくめり毛根と。毛根と。そのつとて又
畠根ル。まどり毛根ル。久米と久に免。久米の意を毛根の意とす。
ヘト。宣長毛ト。藁の本とひく毛ハこそ毛とてつらのあうとと
コト。宣長毛ト。藁の本とひく毛ハこそ毛とてつらのあうとと
アリ。注連繩ハ毛のつとて畠根毛と。毛根と。そのつとて又

毛つとてふとて毛とて毛とて。毛ハ牆もと標結といへつ。毛ハ萬葉集卷二近江天皇崩御之時婦人歌小カムアガリシキトキ
もと勢ぐ大坂ノ毛ト。毛モリホー毛やくす。と又石川夫人
詞。毛の太い毛アリハ。うま毛もと毛わゆ入毛もわゆかくに
もあり。毛ぼう標野ケド毛と。ひとじうれしむ心に領ひよ
れす。意の詠ふ。高田与清の説ふ。ケベモ越隔ヤユコユルヘダテトソ義
ふや埴とク子と。毛毛毛。萬葉集卷十四久敵故之尔麥喰
馬。もと毛。シリクキハ毛後越隔繩毛後へ越ふ隔の繩ト云意リベ。毛
もと。毛と。毛陽と。毛義。毛毛。が毛。毛陽の意とソベセモ
河蝦ハ河鹿の化。毛毛。

世ノ書ドリ小萬葉集ノシトサムニカミモツリバ。おレ
 カラフリシル。それドリケトカヘニ河蝦と河鹿アリトナリヘ。
 河鹿トシハ魚の類ルヰ。鳴きのふアリ。伊豫松山藩士竹村某
 ハトコロ川漁カガリ。とて刀先バツトモのいシテ。山川小鉤ヤリトモ
 ハトコロ。河鹿と云ハ魚刀おれアリ。かくちからか。ドハラシヒ化
 レ。蝦カマツトシハラシバウミカキトモ。聲コエトアリトスリトナリトナリ。
 されゆく日。海のままでハトモク。つる湖西朽木家ケシタの士の話
 み。河蝦のうきろ子ハ魚の躰カラダなりトアミバ。トモ。ハ魚の躰カラダにて
 後蝦カマツト化シ。ト内シナヒケ。武藏国玉川のほり大藏村オホクラムラ
 わキタカツシマチ。がどアリ。刀翁寶筌齋セキナツハイ。石居市郎右衛イシヨウシラフ
 の。も。うち。か。の。川。み。河鹿。ハシモト。トツシ。小鷹。アミ。トモ。ナリ。トモ。

何と外。かくハギトアリトナリ。アベ此蝦カマツハ山河の清られと
 そり。す。ハ。壁カマツ。の。あり。萬葉集ノシトサムニ三吉野ノ石本不
 避バナジ。鳴川津諸文鳴來河手淨トアリ。アベ。れの。そ。と。そ。が
 い。ア。ハ。だ。これ。ア。メ。ア。ビ。ア。この。と。力。古今六帖。ア。ド。ア。レ
 の。ね。ア。ハ。タ。シ。水。の。歌。の。ア。シ。ア。ミ。モ。新古今集雜の部。小藤原
 忠良タヂヨシ。詩。ア。ヒ。ア。モ。ア。バ。ア。レ。ア。ミ。ア。ス。ア。バ。ア。レ。ア。ス。ア。
 の。タ。ジ。レ。の。詩。ア。ヒ。ア。モ。ア。バ。ア。レ。ア。ミ。ア。ス。ア。バ。ア。レ。ア。ス。ア。
 も。ア。レ。ア。ネ。東。友。本。間。遊。清。ア。ヒ。ア。モ。ア。バ。ア。レ。ア。ス。ア。バ。ア。レ。ア。
 者。流。ア。ヒ。ア。モ。ア。ア。ヒ。ア。ス。ア。ア。ス。ア。ア。ヒ。ア。ス。ア。ア。ヒ。ア。ス。ア。
 親。ア。ヒ。ア。モ。ア。ア。ヒ。ア。ア。ヒ。ア。ス。ア。ア。ヒ。ア。ス。ア。ア。ヒ。ア。ス。ア。

山川れるハシトウビニシテハヤモリヤモリミツキヨシキヨ

田沼リハタモルホク青モバヤヒルシテ聲リナリ。

いとれをくゆ

游曾 阿太

萬葉集卷九詠水江浦嶋子短歌ふ常世邊可住物乎劔刀
已之心柄於曾也是君キニ一の游曾能風流士トイアリ也
トシム運鈍のシロカトヨ一畧解ヤリスレルアリ。ベ敏トシムイ
ヘシシカカバ。備中國高松あらわしへつねく愚人のシムと游

曾トシムとシムとシム。阿太トシム真潤の考に今乃世
化野トシムわざーせ。ハ他ノ字ノハの脱ル也。トシム
化トシム。化國トシム。化人トシム。トシム

ノカハ播广
ニテモエード
キルセキニ
テラス

人乃モ一トシムトシム。古事記ト都夫良意富義トありと書紀トハ圓大臣トシム。萬葉
リハ圓江トシム。ツメツメトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。
アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。
アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。

頭

人乃モ一トシムトシム。古事記ト都夫良意富義トありと書紀トハ圓大臣トシム。萬葉
リハ圓江トシム。ツメツメトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。
アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。
アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。アラシトシム。

つゆきより水と潛りてからふ。鳴どりの川づら
早稻かく冠辭かく意あド。高田与清が説ニ壺とつりとくと
圓ノ義リベーと倭訓祭ふりへ。按に花のつがく、局引つが葉。
つば皿ば口つがく 碍甲螺子・粒など同意シ。軒乃水
はくやれむ。僕僕と和名抄もツブ子と訓、後撰集すりあ
まみをま。こハ圓部の義かく頭、鳥帽子をきねとのされ
ざいやをもくへふよ。ネとハ横にからす音あつ。據て東国の方
言ふ酒ツブロノ醉と又ハ栗の實ノハトモ落オテツブ栗
キモハツ。さるはこれかと/or/ありといひと

麻呂

入乃名^ナト^ル何^ナ貴^ル

されぞ鄙下の稱をべ。ミハ撫あくとがくあるとひへれがくに
とくあつ。まかはせしもじきとくやくとくふ。難浪つるのく
つねのくとくまわせおきひのひとく。とくゆことくいとくとく
ろくまのまわせあくとく。今乃人馬のくとくくとくを
つみ麻呂といふがく。

夫妻

萬葉集卷十雜七夕の長歌ふ稚草乃妻手枕述大船乃思
夫とくとくとくとく
うと仁賢絶大年
羅幕音夫阿怜美
よゆくとく萬兼五
ふ得保津必等麻通
良佐用比采都麻胡
歌余くとくとくとく
中抄ふく

夫がさくまつてよのまをうらひ初めり。新古今釋教
部不邪姫成のふ寂然法師にとめにせきぐの小乘
を説いてはされやむとぞもとせんれとのい
うじふはれくとぞとてたゞ

娶　婚　嫁

夫とのぼくもとそくやうに娶の字だ。女と取よ
一ノリ。婚ともわくと訓ハ目をあわしとす。男女をとそ
くると、からむとそくとそくとす。文選より満堂羨人獨与余
目成目と有るが故くとあり。今嫁と云ふは女をてと。婆
比の約夫とくらべ。今俗によると云ふもの下へかくゆり。
そハ鳥獸の牝とくらべてもうとふうどより男の女ふいよれと

夫がさくまつてよのまをうらひ初めり。新古今釋教
部不邪姫成のふ寂然法師にとめにせきぐの小乘
を説いてはされやむとぞもとせんれとのい
うじふはれくとぞとてたゞ

よしとハウツ。古事記ふハ八千矛神の高志國ノ沼河北賣と
夫出よろし時ふ佐用娶比再・阿理多々新用
娶比迹・阿理加用娶勢云くとあまく古言移ります。嫁とそつ
このをなれとくづぐとくづぐ祝詞小
あくべ證券妻
つ後をじよ角女とくとも中山
信者へちびきりべ
トト
夫と娘とくは女の父母よりと名をくワダ女ふ對並すと、
向子ノ中畠れひうとく女と嫁とく男の父母よりと名をく
それ淑女とくうとく。僧慈延グ隣女暗言ふくらハづきよ
もまやうれど

鳥居と神門とて
瑞春暉力死憲瓊談

さひり

鳥居と神門とて

はまふ人間やをも神刀御前小火つ鳥居と云ひ何のまをふ
トリヰ
瑞春暉力死憲瓊談

寒川展清が説ふ鳥
居と云天照大神の天
磐窟小入磐古とし
神深くから遠く
の長鳴鳥とあり
ひより長鳴とをも
鳥と居らるゝを
後世をひ模へ
形と増補へ今鳥
居とハれり今神社
是れ長鳴鳥の遺音
アリ長鳴鳥ハ鷦

トとれ訓ハいきあつとまく社地のとあつて佛家小火つ
トリヰ
トとれ訓ハいきあつとまく神の御門乃あくわべ。鳥
居とアクハ假字かととの訓ハ止處のうへり。門と加度といひ又
トとのも云加度の加ハ義外く青と香青夜と小夜といふがど。
トの上下ゆるふり居處ノ四方ノ垣
トのハ限處の畠ノ内わらう。垣ノ内本かどりの意なり。門と
トの往来をもむく非常のとれ無用のとれとし。しろの標あ
れべ。さるゆゑふ止とハスとあんう。そればその門と云ふ
トとれと止と云ふつと門乃字ハテの字をもづべきものすれ
サミ

トとれ訓ハいきあつとまく神刀御前小火つ鳥居と云ひ何のまをふ
トリヰ
瑞春暉力死憲瓊談

かくのとておれりを云。古事記小天御孫命天降すとて思兼
手力雄天石門分神亦名謂擲石窓神亦名謂豊石窓神此
神者御門之神也とおもふ式の御門祭の祝詞ふり擲磐間
門余豊磐間門余登御名者白氏とぞひとの祝詞小四方能
御門余湯津岩村乃如塞座。朝者御門閑奉夕者御門閑
奉氏疎夫留物能自下往者下乎守自上往者上乎守夜乃
守日乃守登守奉故ふとあり。さればこの神のまじりたまへまく
とのいをもふ。今り朝廷と初くとある人の居處より前後左
右小門とつくり守人をがくれり。さればこの神のまじりたまへまく
をとれん為とすじや。記と於投棄御秋所成神名衝立船戸

神とありと紀の一書ふ投其杖是謂岐神。岐此能加御。那とつひまく黄泉の條一書ふ投其杖曰自此以還雷不敢來是謂岐神。此本名号來名戸之祖神鳥と云。この御名乃來名戸を以て無來と止也。意なり。戸へ門をもとのとがまう標ケリ。衝立とらきば道と標となし。限界と不しきとへは意と御名と考教す。されば臺利為ハヤマツキアカツキ神のアカツキアカツキナガレハナバカミトコトをかがりとひよらべる標ナハツキナガレハナバカミトコトをかがりとひよらべる所居祭住吉。もく開船居時モキモアラシ。船居とハ湊と船とトメ置處をり。歌モリ。家居雲居モリ。とももつと。古書にハ鳥居と。りゆきのよど。伊勢兩宮儀式帳。小も外。がのうち小ハ御門十一間。

内記ハ江家
第神事記小三
三の鳥居トリハ
第一の鳥居トリ第三
二の鳥居ト俗稱
記ハ第三の御門と
ハモリ
社屋代官ハ御室山
宮社トシテ
伊勢守の御室話
伊勢守の三神の宮
と社子れしと
貞觀九年より宮主
宣下し少いぬまえ
風の宮より正應六年
より御門あづかねど上右のすくわく鳥居を主なる
神功と名スミレ
あづか。いよ神の事とと爲と何くの事とと御杜の字を

かくハ全く社の字のあやありなし。出雲國造神賀詞ふ大
御和乃神奈備尙坐葛木乃鴨能神奈備尙坐り。神奈
備ハ神乃よりとてよみ奈と能。母利の約を義ふき、
南備といふれり。ルバ神社とがく神南備とくじとくを
所。唐ふくハニ鳥居のとと萃表とゆ。僧家ふかふうも華
發心門南を修行門西を善提門北は涅槃門の額とがく。レ
キ門標をすまく。神輿ふく四方とまく。トビヤ

古手屋

俗ふ古衣屋と古手屋とがく古衣をす、てよりハ古言ふく
てハの約かし。古細布。書紀小多倍能波伽摩鳥と

あり。延喜式ノハ明細布。照細布。青和幣。白和幣。カヒノ事
れれ。

餅とぬりだよふと

餅とくべとハぬりすみかふくまろくぬらからひるひれり。
源氏のやうに懷姫乃出乃とく擁書漫筆ふりて。されど
行宗集のくびきあわせゆ。ああそりとをつぶれこれ人
のゆがとのもとがく。バとくとくとくとくとくとくとくと
くふかむづく。日高川の画詞ともれりうひとをうとふ
と乃画のくびきあわせゆ。かきばくふうづく。

慈門禪尼

おのきふ。かくかく度根のかく里根とう山里の慈門

やくへふ尾住をりと。そハ藩士武居梅園ハシシタケヰ俗稱次郎ヂヨウが祖父オヤ乃妹アネか
かのカノのめうらうりのむれとタラフとタラフて女メ乃メのめうらうりカニか
尾住イナシ。やく父母カツイ小ワキコナのめうらうりカニからを
きく一枝和尚イチジンワシヤウといへる大タダとこにつくカクとくカクれられひくカク後アフタ
くクふとト坐禪ザシエンのカニ月ツキ老エラシわくカニれカニのカニ人ヒト
もあくカニれカニつカニわくカニ。がと尾住イナシ。と婆カニの山里サンリを
ゆきれりカニ。

ぬくカニにカニまカニみカニうカニづカニれカニとカニおカニたカニ筆シテ
独ワタがカニまカニあカニゆカニべカニおカニやカニうカニのカニさカニに
あカニどカニあカニひカニくカニとカニとカニれカニ夜キヌよカニとカニとカニ
ひびカニとカニあカニれカニとカニおカニねカニとカニれカニとカニとカニとカニとカニ

まカニとカニのカニとカニれカニとカニあカニ。

東儀氏

寛政カウセイ元年エイジ九月クモク紀伊國キイノクニ若山ワカヤマ沼田ヌマタ何某ナニガシといへりとす
ふあちカニドカニとカニひくカニれカニしカニ何ナニれカニとカニつカニいカニひくカニ
近カニくカニワカニ君カニおカニがカニとカニてカニ無カニ楚カニ不カニまカニりカニとカニ國クニ中カニとカニみカニうカニれ
あカニのカニ上カニ中カニ下カニ下カニあカニぐカニふカニらカニとカニひカニうカニとカニかカニりカニうカニ
きカニ撃カニかカニそカニとカニとカニのカニやカニ東儀トウギをカニとカニてカニ樂ガクニ人ヒトにカニ
おカニんカニにカニれカニとカニとカニりカニとカニねカニ

まカニのカニ本カニのカニやカニとカニとカニおカニいカニかカニとカニ三カニ
熊野カニのカニ山カニとカニおカニいカニとカニとカニかカニとカニけカニとカニおカニすカニ
せカニうカニおカニうカニせカニうカニうカニとカニまカニれカニとカニ人ヒトにカニれカニまカニまカニ

まことにとひかこよび。そもろひのつゞいしの唐カタシマがやまらし
とのたかひるがくつゆく。そもろひのとわく用意を
させねばよだらし。まづおもてつしをもひふれん。
このきみのねんこゑど。よとくりがごく彼人の力をそそぐこと

まくはりにくらむことと、あくまでとくわくわく

棉衲禪師并三女刀ミンナフゼンジ

二十年わらうとのじ。備前國ビゼンノクニ小早川山下林寺セアリンジとす。禪
林小屋セイジわざに前住棉衲ミンナフゼンジせざり。ととく日壇ヒツル一位殿イチエンドウの
を。ととくからがくゑる款シタスとくかふるわら山家水とす。に
じもんへまくろみとくじめやくくすくをふれき
づづくとあくとひとをもだ。すこ藩士馬場嘉維ツカハドウババヨシフサ俗稱舞門モモカミ方

かくさるは去年ハ江戸カシタふあつて掲千葉チヤウノトガとらつく交トキる。
八月ハチメじやくアツク女郎花ヲナハシとくにゆくからとく。久義子ヒサシキコとくにゆくと
あく

つあさとつまどうれり。とくがふ。ごうれおとくに
ひりうり二首ツノヒとく。ごくくとく。とく。とく。かのゆくと
くふくみくとあれ。にぎしう。今なれをくく。す誦スヂド
ぬ。それとくれをくく。戰イヤとくあくとく。とく。とく。とく。

れとく。ひじあくね。伊豫イヨの松山マツヤマを。藩士佃ツタケ久微ヒサキ俗稱市郎
右卫門

う母ナド趙子トリカハシヤカレテシテ。シテモカ
トカラシヒニカム。シテモカレテシテ。シテモカ
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
鹿の聲シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。

えもねせびりしう。シカ。シカ。シカ。シカ。
我ハシカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。

隱士茂睡

隱士茂睡ハ江戸ノ人ふく乃田茂右衛門と稱。一後平郷

の梨子坂邊ふ住。梨本と号す。父ハ何某殿の家老也。
渡邊監物忠と號する人の大男なり。父乃忠ハ戸田与五右衛門
忠勝^{タカシ}次男なり。父忠實家の稱と冒す。著
述あり。寶永三年四月十四日卒。人なり。輪池
戸田山城守と號す。翁說然もと隣女惜言に、^{翁說}隱家の
茂助^{モスケ}元禄の頃、江戸淺草の市人ふ茂介とよ
きのとくし。ちつとももてれず、へそものつとひて、歌
と出たり。まじめにひきのり歌一曲。うそのをとくよ
ひひつとく。我ハシカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。シカ。
近世間人傳ふ。隱家茂睡とあり。江戸奉仕士ふ隱
道き人れり。シカ。歌道ふ古學と稱。シカ。此人近世の

ハリト。ルル常
陸風古記に古者自
相摸國足柄岳坂以
東諸縣總稱我姬國
當時不言常陸唯稱
新治筑波茨城那賀人慈多河國云々と
あると云ふ。トモトモ
陸奥小山がを川と稱
アヤニ。陳ドガカラ

のよアカシヤサシハのと下を略ハダシテアシマハ。其所此
ヒアラミタ略ハダシテアシマハ。モアラニヒアラニヒアラニ
ヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ

ヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ

一

モアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ
ヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ
ヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ
ヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ
ヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ
ヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ
ヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニヒアラニ

四方矢國より京にゆくとのぼらひ。京のくわくわく大宮所と
上トキニイハジリテアラヒカカツメシテ外かゆくとカラヒトノモ
ト後も書どるに。アラモトカカツメシテカホカホの言葉などもと
ミモドカガラフセキ。書どるとミモドカガラフセキ。トウド
ミモドカガラフセキ。トウド

ミモドカガラフセキ。萬葉集十八大伴家持宿
禱モ坂上郎女に報歌安万射可流比奈能都夜故余安

米比度之可久古非須良波伊家流思留事安里トアラヒ

をシナリ。國府と庚の都トキニシテ佐勢リトアラヒ。アラヒ
トアラヒ。後乃書どるに比奈の都トクヒ。アス歌トアラヒアリ
アラヒ。萬葉集トクヒ。アス書トアラヒ。アシニアシ。此
集小リこの事ハカリ。此集を誤字に付カシ。證トアラヒ。アシ
本居太平が都夜故ハ夜都故の事アリカナ。アリヒト宣
長ナリ。アリヒト然アベ。國府とみむニアヌ。アリナ。遠の朝
庭トハその事アリカナ。アリヒト宣長ナリ。阿千葉も猶
考ム前アリ。アリヒト宣長ナリ。アリヒト宣長ナリ。アリヒト宣
といひ。アリヒト宣長ナリ。アリヒト宣長ナリ。アリヒト宣
考ム前アリ。アリヒト宣長ナリ。アリヒト宣長ナリ。アリヒト宣
中ナリ。

えど。むかし、おとづれのあれば、ちふねのが
説く。うしの耳。かく、うきよとがくへられたりわべ。千葉も都
夜故と書かず。かづくらむ。すこしとて、この坂上。郎女ふくよ。哥
きり。おそれ。おもい。ばうけ。くま。の、うきよとくべき。ふ
くよ。郎女のくじり。都祢比等能。故布登伊敷。欲利波。安麻里
余互。和禮波。之奴。信久奈里。余多良受也。と。のつまく。世のつる
の意。くわく。かく。うきよとくべき。わく。の、うきよとくべき。
たゞ。せつぶ。うきよ。うきよ。の、うきよとくべき。越。かわく。今。鄙
のを。つまく。うきよとくべき。かく。天人の戀。たまく。うきよとくべき。
いきく。かく。うきよとくべき。うきよとくべき。天人ハ。郎女。と。うきよとく
べき。かく。うきよとくべき。うきよとくべき。千葉。も。左傳。と。引く。周國名。

人を天人ともいふ。されど、かく。うきよとくべき。古今集。難部。おは
じこのれとづき。今。あり。りき人が。くまと。うきよとくべき。天慶。ル
天人。ア。おれ。され。一本。おは。おも。じ。の。を。あ。元。皆。本。みた。能。字。れ
くく。ひ。あ。や。ふ。假。字。つ。み。り。と。千。葉。ま。く。比。奈。都。夜。故
と。み。う。か。う。萬葉集。五。卷。山。上。憶。良。の。く。に。天。さ。う。か。し。れ
い。う。と。か。と。し。い。く。み。や。こ。も。も。お。り。わ。と。く。え。ふ。く。
お。り。入。れ。都。に。ひ。く。と。外。國。成。あ。た。と。う。か。と。お。れ。東。乃。都。と。よ。の
ゆ。べ。き。よ。れ。また。後の書。小。鎌倉。と。く。東。都。と。よ。し。れ。ま。レ
く。今。も。江。戸。と。東。都。と。よ。し。く。な。と。よ。く。あ。わ。ん。と。お。そ。く。う。い。能
じ。皇。國。の。學。じ。じ。あ。と。の。さ。ど。か。り。の。と。つ。み。と。お。れ。ハ。と。い。し
れ。ま。れ。都。と。字。ハ。字。書。ゆ。天。子。所。宮。と。う。れ。か。て。そ。都。會

乃意ふを多くつづらよまく卿大夫采邑曰都とあり左傳より大
都不過參國之一と爲ふく支封の城を都城といひ都城過
百雉國之害也れども。南浦文集より薩摩を國都とし
そぞくしてひれどこれかくゆつて人の志もとやくがこの一
さふれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ
を都城といひすれり國都とすふうちもとからべ。とく
からせき力りきをも、證ともちうかくし。筑前風土記より太宰
府を西都とすて豊前国より京都郡のゆゑに他の例とおがし
ぞひくわへとくわへとくわへとくわへとくわへとくわへとく
うと名く姓ふ都とすあれ、鳥ふりうる名だくわへとく
東都東都といふん證とハキヤがくし大御国とすくわへとく

天皇の御しゆとせうふがくわんと稱して京とすく都とくと
ミシムふうとくとく稱すべし。奈良とすく南都とすく舊都とく
れり。江戸とく東都といふく京と西都とくとくとく
ひくとくわへとく。河内とくがくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かくすく大御国とすくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
復小谷三思書云富士ハ毛と吹自穴ノアト、とくとくとく
きく息吹不あからぬの名ふや。とくとくとくとくとくとくとく
のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ふいとくとくとく風吹と吹づよし。神名帳ふ出雲国意宇郡
布自奈大穴持神社。けり。こハ駿河国富士の神とくとく

いとひよしをんふをもとよりはかへてまく東ふ正

名とづくれり

網云この説よりのきひけりと富士とと富知みく大出の
れ。富ハ古書保の音みく不の音ふわゆと古事記意富岐
美能意富祁命激富義夜比登富良富良れりゆりてこれ
かの假字にきらひらふりよバカジムヒベー。神名帳ふ富知
神社とかりと正。出をとどもづるはつねちとあづともぢ
せハク人書たれたり。今も豊後國ふ上治とうとくとふ日出と書
フ。こハ何とおく人のこと。おち。それバ富知ハ火出乃義ナリ。あ
きし。富を不とむいハ後のもの。まく山頂の穴ういがくれれ
を遠く望毛バ煙のまくやくといふかくまくふ犬のえ出

トハ日本後紀小延暦廿一年正月駿河國富士山晝夜恒
燎砂礫如巖云。三代實錄云。貞觀六年五月駿河國言
富士郡正三位淺間大神大山火其勢甚熾燒山方十二許
里光燐高二十許丈有雷地震三度歷十餘日火猶不滅云
同六月甲斐国言。駿河國富士大山忽有暴火燒碎齒臺草
木焦熱云。寺と行まくるがもう少しとす。近くハ寶永の火ヒ
シホミエバ。リ。古今集の俳諧詞ふ。の様もかくねを
ひくや。かくねをひのあま。の。經くの山リとゆゑ
えり。の。富士ア浅間の。づか。かくねをひの。の。の
れ。富知神社と。の。かくねをひ。神とい

開國安浦^{カシマ}富知

火出の義^{カミ}と^ハ富知

六々^{カシマ}と^ハ富知

神社^{カシマ}浅間^{カシマ}神社^{カシマ}

カシマと^ハ神名帳^{カシマ}

河國富士郡^{カシマ}富知^{カシマ}神

社^{カシマ}浅間^{カシマ}神社^{カシマ}

カシマと^ハ富知^{カシマ}神

正三位^{カシマ}浅間^{カシマ}大神

カシマと^ハ富知^{カシマ}神

大山^{カシマ}大山^{カシマ}大神

カシマと^ハ富知^{カシマ}神

又々^{カシマ}富知^{カシマ}神社^{カシマ}

同郡沼津^{カシマ}大山^{カシマ}大

神^{カシマ}大山^{カシマ}大神

大山^{カシマ}大山^{カシマ}大神

カシマと^ハ富知^{カシマ}神

つまづくに。大穴持神といふがむれ。大宮の社司^{ヤレ}出でる

圖^{カイ}とくらむとくふ富士の山力上ふ三神のかくらをくわふきう。中を

彦火々出見命、右ハ大山積命、左ハ木華開耶姫命なり。かれと^ハ

を合せ^ハつて、かくらと^ハ火出名^ハと彦火々出見命と富

知ノ神といつて、もつて、彦火々出見命の御親^{オシナ}ふすんくと火乃下^{ハシナ}。

開耶姫命といひと^ハつて、つまづくに。大山^{カシマ}と^ハ彦火々出見命の御親^{オシナ}ふすんくと火乃下^{ハシナ}。

みよのまろと^ハ彦火々出見命の御親^{オシナ}ふすんくと火乃下^{ハシナ}。

間^{カミ}ひづくを徳^{トコト}と此山^{カシマ}みよのまろと^ハ木華開耶

姫命ハ大山積命の御^{シヒト}をすせり。三神^{ミツノミコト}にひづくを

んじゆゑし。そハ古事記^{トナキ}即作^{トナキ}無戸八尋殿^{マヒロドノククリテ}入其殿内^{ソトナキリテ}ハニ

モテスリフタキ^{ウベスリキニアタリテ}ソントノニヒツケ^{テナモウマシルカレヲヒツケ}アタミコトニモハサヘシマ

玉塗塞^{モテスリフタキ}而方產時以火著其殿而產也。故其火盛燒時所生

火のれり。火をもとめ。かく火々出見命と御名をたゞ^ハとづけ。か

ゆゑゆゑと^ハ富知の大神といつて、かく火々出見命と御名をたゞ^ハとづけ。か

火のれり。火をもとめ。かく火々出見命と御名をたゞ^ハとづけ。か

紀より駿河浅間より木華開耶姫として富士もなれ。伊勢朝明
郡より布自神社櫻神社相並甲斐國金櫻神社此神と云ふ
也。さくらハ開耶乃轉するを爲す。或ハ咲簇のましの約くわう
少へて。川ぞくふつとすくねとふとくの浅間ハいきくの略す
あさくらのゆと畧。さくらのゆとくと通音。かよ。櫻の轉す
まちすくとあさくら。大宮ル甲斐の吉田ル浅間大神と名はば富士の
神ハ木華開耶姫命。火出の義ハ火と出見命。やくり開
耶姫命。さくらゆとくを有す。ちぐく御名ふつとく火と出見命
やくりんとくとく。し。さくら富士の神ハ女体なりとて開耶姫命
移す。とくとく竹取物語ハかぐや姫君後ついで天小かづの
タケトモハことあど開耶姫命。とくとくかーがくとくのなかづ。

知と士とハ通音。やくとや萬葉集乃とふと引くこの例。不
ふと此富知も神社と富知ふつとれるハ草書。うとうつじふと
うとうつじふとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
さくら草書と士とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

このと條このふのとれつきとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あふれん本重

あふれん本重

初編終

芳水處士平晴保書丹



大寂菴上人著書梓行目錄

うきくされわと 初編
一冊 これとへ方法をゆきあづしていざる考

ねぐらく

二編

三編

嗣出

伊勢物語昨非抄

三卷

近刻

これハ古人の諸註ふがくもいわばはてに後

瀬田の故殿ノ君名ミ出だしまさるを鈴屋の前
乃スシムシテシムルトシテシルト小篠飯翁
子人とのくわ校合せりと上人署註とくわて
梓小のぼせとおれり

藏板

玉 挞 頭

小本一冊

近刻

この書ハ冠辞考調草小苑等やどれだら枕詞を

一詩歌の長篇をい小常陸の御田跡ゆきすか
えと水戸の安樂寺が梓小見れり

これハ親鸞聖五百五十年忌乃く上人の御れ

三才観白辨 和尙の傳す 一冊

一冊已刻

何誰道人おとこ 様小工せられぬより澤菴

さゑく自記 一冊

萍蹟記聞 二冊

この本は人所の月とこれ色とれいな事
あはまくねもて時乃らの化うけじよとまこと
もくゆくじよが小接一名称えさ不われば
本居宣長の標注をくふくふあるか
いわくうめぐら

けむどく法行脚してのあくまくせん
ごくと保くわる奇談わり

真宗名記一冊

淨土真宗の門葉と小五家のくみと
とべきがく小海引めぢ

真宗應問錄 上下

アホ一宗安心の要と僧俗より上人ふせたる
の別義古と走多の訛り

和讚嘆得錄 一冊

三帖御和讚御製造乃次房吉趣と
明辨せり書くわ

藏板

文化十四年丁丑十月

江戸新橋南大坂町

角丸屋甚助

伊勢屋忠右衛門

製本所

